

つながり、かさなり、ひろがる授業(2年次)

～「知」を鍛える授業展開～

研究部

はじめに

大阪教育大学池田地区附属学校研究会における共同研究も4年目を迎え、さまざまな課題を抱えながらも一定の「池田の小中高連携のスタイル」が構築されつつある。そもそも「連携」を試みなければ小中高間における課題も生じることはない。3つの学校種が連携を進めていく以上、各校種の考えの衝突が生じ、そういった衝突を乗り越えることでより連携が深まっていくことを年を追うごとに確信を得ている。

昨年度より小中高の共同研究のテーマとして「つながり、かさなり、ひろがる授業」を掲げ、12年間で育てていく総合的な能力＝「知」を各教科・領域で明らかにすることで、それぞれが目指すべき子どもの姿の共有を図ることができた。どの教科・領域の取り組みにおいても、決して知識の詰め込みに留まることなく、習得した知識や技能を存分に活用することや、思考力・判断力・表現力を駆使して取り組むべき課題を子どもの能力に応じて適切に設定していることが伺える。こういった各校種の教科・領域が取り組んできた学びの中に存在している、「つながり」や「かさなり」を教師自身が意識することにより、12年間における子どもの学びの姿がイメージでき、総合的な「知」を身に付けた子どもの育成につながると考えられる。そこで本年度は「知」を鍛えるための授業方を明らかにすることで、各教科・領域、各学校種で目指すべき子どもの姿がより具体化されたものとして共有できると考えた。

1. 主題について

「つながり、かさなり、ひろがる授業」とは、附属池田地区の教育課程において、各校種、教科・領域におけるつながり、かさなりを意識して実施される系統性と階層性を持った質的にも量的にも優れた授業のことである。図1に示すのが、各校種における系統性と、各教科・領域の階層性のとれた教育課程の全体像である。実際には図のかさなっている部分だけではなく、すべての校種、教科・領域において、立体的につながり、かさなる部分があることを押さえておきたい。中学校内においても、国語と英語や、理科と総合(安全)等、様々な教科・領域間で互いの学習内容を理解し合い、相互の学習活動に作用し合える体制を整え、階層性の取れた教育課程の実施を進めていくことが重要である。各教科・領域において重複する内容であっても、違った視点で迫ることにより、子どもの学びがより高次なものになることが期待できる。しかし、自己の学びの全体像が見えない子どもに対し、かさなりの気付きを一方向的に任せるのではなく、子どもの学びの見通しを持った指導者自身が意識して子どもの学びを「かさねる」ことも必要である。各教科・領域のかさなりを子

ども自身が意識できるようになったとき、すなわち子どもの中で断片的と思っていた学びが繋がった瞬間はまさに、各教科・領域の枠を超えた高次な学びとなる。また、小学校とのつながりをふまえ、発達段階に応じて実施される授業においては、子どもが今までの自己の学びを振り返ることで、自分の能力を確実なものとし、できること、わかることが着実に増えている自分の成長にも気付く。さらに、高等学校や社会生活とのつながりをふまえた授業では、子ども自身が自己の学びの将来像をイメージしながら、これからの自分に必要な力、今身に付けておくべき力は何なのかを自覚することができる。このような自己の学びの積み重ねや自己の能力をメタ認知し、自己肯定感をもって学びを進めていく中で、子どもたちが「なりたい自分」を明確にイメージし、実現に向けて主体的に行動しようとする、いわば自己実現を図るための態度が身につくものとされる。こういった系統性、階層性を持った教育課程の構築が子どもたちの将来にわたる自己実現につながることを見据え、共同研究を進めることとした。

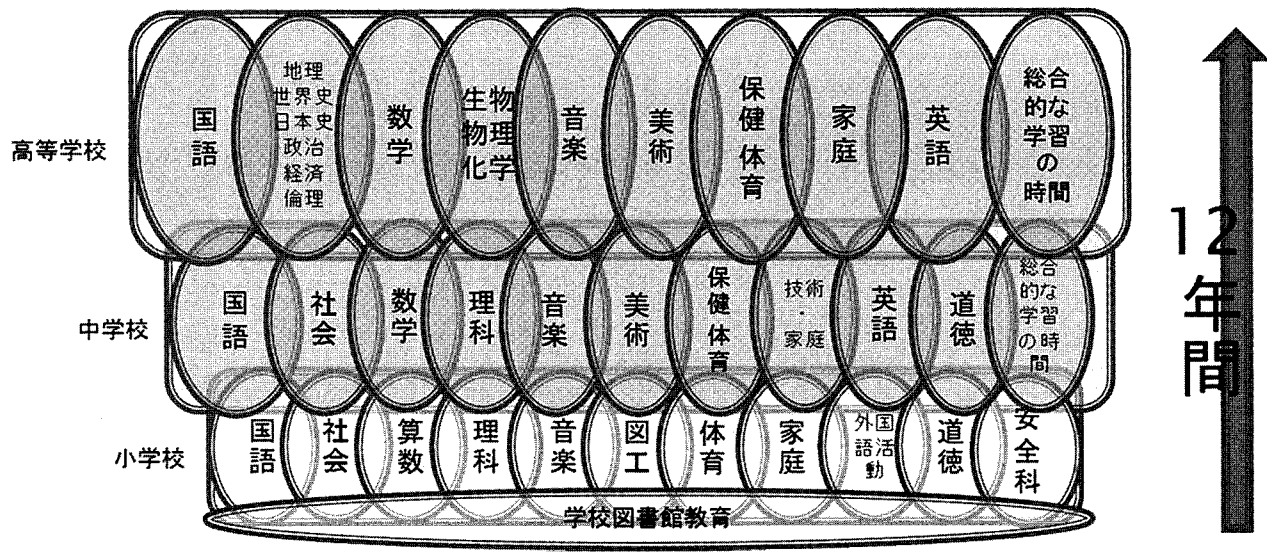
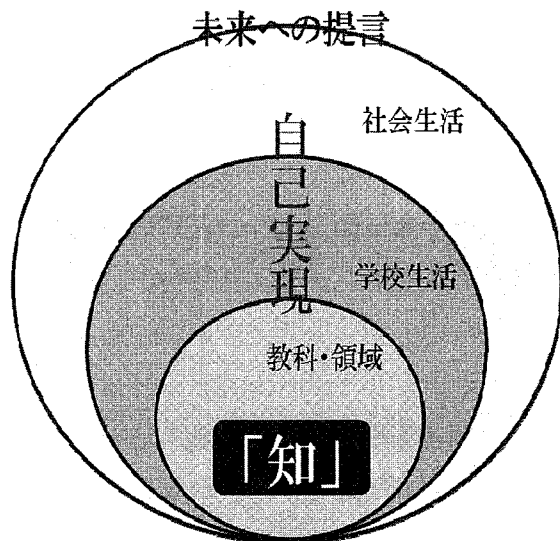


図1 附属池田地区学校園における各教科・領域のつながりとかさなりとひろがり

2. 各教科における「知」

「知」とは、単なる知識や技能ではなく、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、課題解決力、他者と関係を築く力、豊かな人間性などが包括された総合的な力（能力）である。各教科・領域における「知」はいわばその（教科・領域の）本質となるもので、系統的、階層的な授業実践の場において育み身についた「知」は、図2に示すようにその他の教科・領域、学校生活や社会生活へひろがり活用され、自己実現の礎となる。『将来果たして何の役に立つのか』といった疑問を子どもに抱かせるような、断片的で定着も不十分な知識



や技能をもったところで自己実現は図れない。それぞれの教科・領域の本質でありながら、他の教科・領域とのかさなりがあり、他の場面で活用できる能力＝「知」は決してその場限りのものではなく、各発達段階に応じた指導で育まれ、鍛えられていくことにより、子どもを取り巻く環境が変化しても対応できる生涯を通して活かせる能力である。

昨年度は、各教科・領域における「知」についての定義を行い、附属池田地区において目指す子ども像の確立を図った。以下の表はそれらを取りまとめたものである。

教科	教科における「知」
国語	情緒力を伸ばし、心情を理解する力、論理的に判断し、表現する力 伝統を現代に活かす力
社会	多面的・多角的な見方・考え方の獲得を通じた、ある事象への価値判断・ 意思決定を行うことのできる能力
数学	数学的な思考力・数学的な表現力・数学的な判断力・数学的な活用力
理科	「科学的な自然観」とその育成に携わる様々な能力
音楽	知覚・感受したことをもとに、自ら課題を見つけ、創意工夫し、他者と関 わりながら音楽で表現する力
美術	感性をはたらかせて価値をつくる力
体育	意欲的に仲間と仲良く運動する中で、各種の運動の楽しさや喜びを味わえ るよう自ら考えたり、工夫したりする力
技術・家庭科	家庭・社会生活における実践力
英語	相手の意図を理解し、その理解した内容を自分の言葉で表現することがで きる力
道徳	自ら直面する状況において、他者には個々に様々な道徳的価値判断が存在 することを知り、自らの自覚において経験をもとに判断する力
総合的な学習の 時間	自己を知り、他者を受け入れ、関係性の中で課題に取り組み積極的に生き てゆく力
図書館教育	情報を活用して問題解決する能力

これらの各教科・領域における「知」は、一見別々のように感じられるがその内容を詳細に見れば、判断の元は様々であっても「論理的に判断（国語）」「ある事象への価値判断（社会）」「数学的な判断力（数学）」「経験を基に判断する力（道徳）」など判断力を「知」としたものの、国語、音楽、英語と表現の形態は違っても「表現する力」を「知」としたものなど、かさなりがあることがわかる。このかさなりを互いの教科・領域で共通認識することで知の重点化が図られ、かさならない部分についての意識を持って授業を進めることにより教科・領域独自で補完すべき知が養われる。このように各教科・領域で「知」を強め合い、補い合いながら進める系統性・階層性のとれた教育課程において総合的な「知」を身に着けた子どもは、将来の自分を見据えて目的を持ち、実現に向けて自分に必要な能力を吟味し、その能力を努力により高めたり、定着させようとする事ができる。すなわち、自己実現を図るための態度が養われると期待される。

3. 昨年度の成果と課題

昨年度の研究実践で得られた成果はまず、小中高で1つのテーマにしぼったことによって、共同研究に対する意識が高まり、各教科・領域の「知」を明確にし、目指すべき子どもの姿の共有を図られたことがあげられる。このことにより、各校内だけでなく、池田地区全体として子どもを育てているという意識は確かなものになり、共同研究を進める上での大きな礎となった。また、各教科・領域内で定期的に集まれるように、小中高が一つの組織として体制をつくりあげたことも大きな収穫であった。

一方で明らかとなった課題は、小中高それぞれの発達段階における「知」を身に着けた姿が十分に共有されなかったことがある。各教科・領域内には「つながり」の部分だけではなく、つながらない部分の「溝」や「節目」もあり、その部分において子どものつまづきがあったり、その部分を乗り越えることでより高次の「知」が身につくことも考えられる。各発達段階に応じた適切な課題を与えてこそ「知」は身につくものであり、それぞれの段階における「知」を身に着けた姿＝共通のものさし（評価）を各教科・領域・校種内で共有してこそ、系統性、階層性をもった教育課程だといえる。そこで本年度は3年次に向けた評価を意識し、授業方策に焦点を当て、それぞれの発達段階に応じた指導法並びに各教科・領域における共通した授業展開を相互に理解し、子ども像の共有化をより深めていくこととした。

4. 「知」を鍛える授業展開

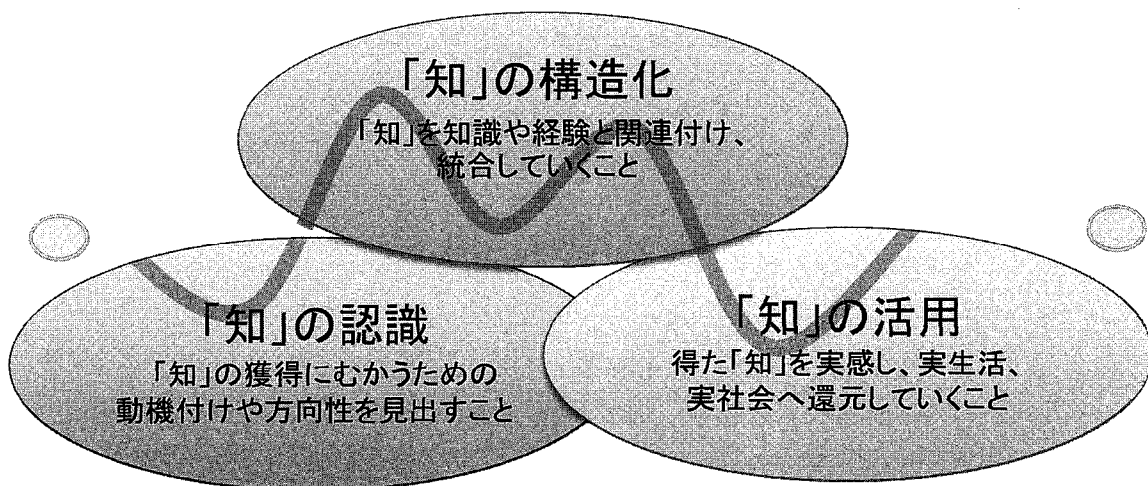
本年度の副題「知」を鍛える授業展開とは、子ども達が持っている「知」を総動員して向えるような課題・授業を設定し、学習の結果新たな「知」を獲得したり、それぞれの「知」をより良質なものにしたり、精錬させたりできるような展開を意味する。それには子ども自身が「知」を獲得するための意識を持ち、適切な時期に適切な負荷をかけ、紆余曲折を経ながら「知」を統合していき、そこで得たり、より高まった「知」を実感できるよう、「知」の認識、「知」の構造化、「知」の活用と3つの視点を含んだ授業展開を提案することとした。

「知」の認識とは、子どもが「知」の獲得に向かうための動機づけや方向性を見出す活動である。これには算数・数学科における、資料の中から課題を発見する活動や、体育科の自他の能力を把握し、課題と向き合うことにより見通しをもつ活動、図画工作・美術科の対象から価値を感じ取り、主題に意識を向ける活動などがある。授業において自分が何を獲得するか、何をどう実現すべきか、何を達成するのかといった方向性を示し、明確化することにより、「知」の獲得へと向かっていくことができる。

「知」の構造化とは、「知」の獲得に向けて子どもがすでに身につけている知識や今までの経験と関連付けながら「知」を統合していく活動である。これには音楽科の表現の工夫やコミュニケーションにより知覚・感受を深める活動や、道徳の色々なもの見方や考え方があることを知り、新たな道徳的価値の自覚をはかる活動、安全・総合・情報科の資料をもとに現状との比較を通して分析

する活動などがある。授業の中で最も子どもが紆余曲折する場面であるが、この過程を経ることが「知」の獲得においては必要不可欠である。試行や実験、修正、分析を行い、認識した「知」を既知の知識や経験と関連付け、統合していく中で新たな「知」を獲得したり、「知」をより良質なものにできると考える。

「知」の活用とは、認識・構造化の過程を経て獲得した「知」を実感し、実生活、実社会へと還元していく活動である。これには国語科の学んだことを説明したり、感想文や批評文を書く活動（単元をつらぬく言語活動）や、理科の科学的な知識を日常生活に還元する活動、技術・家庭科の身につけた知識や技能を自分自身の生活の中で実践する活動などがある。獲得した「知」は授業の中だけでなく、自分自身の生活や所属する共同体において発揮できるものであるからこそ、子どもの自己実現の礎となる。「知」を活用することにより、学びの成果や価値を感じ取り、それは新たな「知」の獲得への動機づけにもつながっていくこととなる。



以上の3つの視点は「知」の獲得のために各教科・領域及び各校種で行う授業展開の中で包括されているものであり、これらを明確にすることにより、それぞれの場面における「知」を身につけた子ども像がより具体的に見え、共有化も進んでいくことと考えた。

5. 本年度の成果と課題

「つながり、かさなり、ひろがる授業」を主題に掲げた研究も3年次を迎えようとしている。各教科・領域の「知」がより焦点化され、小中高の連携体制も進む中で、それぞれの教科・領域において授業形態を揃える取り組みや、共通の単元・題材を用いた提案授業を行うことにより教科・領域ごとの「縦のつながり」の柱も強固なものとなりつつある。

本年度の副題である「知」を鍛えるための授業展開の成果として、「認識」「構造化」「活用」の3つの共通の視点をもつことにより、教科・領域の系統性がよりはっきりし、子どもたちの主体的な学びが展開される授業を構築することができたことをあげたい。また、各教科・領域の「知」を鍛える授業の中で共通の展開や題材を取り上げることにより、各校種間における「連続性」と「不連

続性」が明確になったことも大きな収穫であった。

課題としては、小中高の校種間のつながりを明確にする過程において、小学校低学年から高学年へのつながりが明確にされていないことや、小中高の連携をあげながらも実際は中学校が「小中」「中高」の二本立てのような研究に陥り、却って中学校の学びの姿がぼやけてしまうことがあげられる。また昨年度の課題である、小中高各段階において「知」を身につけた子どもの姿や、その姿を見取るための具体的方策も十分に明らかになっているとは言えない。

これらの課題を受けて、来年度は本年度の研究における授業展開の3つの視点を念頭に置き、「指導と評価の一体化」を図っていく。各教科・領域でそれぞれの授業展開ごとの目指す子どもの姿を掲げ、その姿を客観的に見取るための評価方法（授業の中での子どもの変容を客観的に見取ることのできるワークシートの工夫やポートフォリオの作成、獲得した「知」を活用するパフォーマンス課題の設定など）を提案し、各教科・領域の「知」を12年間の学びの中で構築される過程を明らかにすることで、「つながり、かさなり、ひろがる授業」の集大成といえるような研究としたい。